②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信（セ01）	文化遺産国際協力センター	47
中国壁画の保護に関する日中共同研究（保修08）	保存修復科学センター	48
東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力（セ02）	文化遺産国際協力センター	49
西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（セ03）	文化遺産国際協力センター	50
在外日本古美術品保存修復協力事業（セ04）	文化遺産国際協力センター	52

文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信（②セ01-12-2/5）

目　　的

文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国等において文化財保存・修復事業を推進する。

成　　果

1．国際会議等出席：下記の会議等に参加し、文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集した。2012年６月24日～７月６日　世界遺産委員会（サンクトペテルブルク）、７月20日～23日　ASEAN＋３文化協力ネットワーク会合（フィリピン）、12月３日～７日　無形文化遺産政府間委員会（パリ）世界遺産委員会については、研究発表の形で報告した。９月４日、　神葉子「第36回世界遺産委員会報告」東京文化財研究所　総合研究会。2013年３月15日、　神葉子「第36回世界遺産委員会報告」第12回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会。

2．文化遺産（動産文化財）保護についての調査・研究：アメリカ国内には２万館を超えるミュージアムが存在し、指定品クラスの日本の美術作品を収蔵している美術館も少なくないが、文化行政を担当する省庁は存在せず、独自の方法で文化財が保護されている。アメリカ各地の美術館関係者に文化財保護の現状について聞き取り調査を実施するとともに、ワシントンDCに本部を置く文化財保護関連組織や国立の美術館・博物館にて調査を実施した。日程と主な調査先：１月26日～２月２日　AIC（アメリカ文化財保存修復学会）、AAM（アメリカ博物館協会）FEMA（連邦緊急事態管理庁）、Heritage Preservation（アメリカ文化遺産保護機構）、ナショナルギャラリー、フリーア＆サックラーギャラリー、国立アメリカ歴史博物館、国立アメリカ・インディアン博物館、フィリップス・コレクション等。将来的に汎用性の高いデータベースとして活用するために、本年度の情報収集の成果は既存のデータベースと連携できる形で集積した。

3．対訳法令集シリーズの刊行：韓国、ミャンマー、フィリピンの３ヵ国について、文化財保護関連の基本的法令の条文を和訳し、対訳法令集シリーズとして刊行した。

4．研究会の開催：染織品は世界中で幅広い時代の作品が存在し、人類共通の文化遺産として安定した状態で保存されることが求められるが、研究者や専門的な保存修復技術者は絶対的な数が不足しており、国内外の専門家による情報共有と連携強化が急務の課題と言える。そこで以下の研究会を開催し、50名ほどの参加者を交え活発な研究交流を行った。染織品保存修復に関する研究会「古代から現代へ―ウィットワース美術館の染織コレクションとその保存修復」アン・フレンチ氏（イギリス、マンチェスター大学ウィットワース美術館）、討議司会：石井美恵　10月19日

刊行物：・『各国の文化財保護法令シリーズ[15]　韓国』　東京文化財研究所　13.3・『各国の文化財保護法令シリーズ[16]　ミャンマー』　東京文化財研究所　13.3・『各国の文化財保護法令シリーズ[17]　フィリピン』　東京文化財研究所　13.3・『国際資料室蔵書目録』　東京文化財研究所　13.3・『世界遺産の動向と課題―第36回世界遺産委員会―』　東京文化財研究所　13.3

研究組織

○友田正彦、川野邊渉、山内和也、加藤雅人、江村知子、境野飛鳥、邊牟木尚美、島津美子、鈴木環、安倍雅史、佐藤桂、新免歳靖、渡部妥子、高多加奈子（以上、文化遺産国際協力センター）、今井健一朗、石井美恵（以上、客員研究員）、　神葉子（企画情報部）、宮田繁幸（無形文化遺産部）

中国壁画の保護に関する日中共同研究（②保修08-12-2/5）

目　　的

本研究は、国際共同研究を通じて東アジア諸国の保存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成することを目的として、敦煌莫高窟壁画及び陝西省墳墓壁画をはじめとする中国の文化遺産の保存修復のための共同研究を実施し、人材養成に協力するものである。

成　　果

【敦煌莫高窟壁画】

敦煌壁画の保護に関する日中共同研究は、平成23年度から第６期共同研究（５カ年）が開始されている。第６期は、第５期に引き続き第285窟を対象として壁画の製作材料と製作技法に関する研究を継続実施し、これを完成することを目的としている。今年度は現場調査としては最終年度という位置づけで調査研究を実施し、データの整理・分析等を行った。

１．現地調査１：2012（平成24）年８月22日～９月４日。第285窟４壁でのハンディ型蛍光Ｘ線分析装置、顕微鏡、分光光度計を用いた追加調査を実施した。第285窟以外の莫高窟諸窟及び張掖・酒泉など甘粛省西部の諸石窟で関連調査を実施した。

２．現地調査２：2013（平成25）年１月10日～20日。第285窟内に足場を組んで天井部の壁画についてハンディ型蛍光Ｘ線分析装置、顕微鏡、分光光度計を用いた分析調査を実施した。環境に関する調査を実施した。

３．敦煌研究院研究員の来日研修：2012年６月11日～７月４日の日程で張化氷研究員（分析化学）、薛平研究員（環境）を招聘し、各担当の内容に関する技術研修を実施した。

４．データベースの完成：劣化状態に関する情報を中心にデータベースに入力するデータの整理作業を行った。

５．報告書の作成：東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の2012年度成果報告書を編集し、発行した。

【陝西墳墓壁画】

陝西省西安市では近年周辺地区の開発に伴い、近年大量の古代墳墓が発見されている。その中に毎年必ず数カ所の壁画墓が含まれるが、剥ぎ取り、埋め戻しを原則とし、作業時間も短いため、必ずしも十分に壁画情報を収集できていない。発掘機会を利用し、環境調査と保存処理、及び記録保存に関する方法検討のための研究を日中共同で行い、中国の壁画保存に貢献しようとするのが、本研究の目的である。

１．現地調査：2012（平成24）年８月19日～21日。乾陵章懐太子墓の内部の状況調査を行った。

２．現地調査：2013（平成25）年２月24日～28日。章懐太子墓及びその他の壁画墓について、現地調査を実施した。壁画の表面含水量測定及び簡便な紫外線撮影方法を開発し、それによる壁画材料の傾向把握について方法を検討した。

研究組織

○岡田健、早川泰弘、犬塚将英、吉田直人、渡邉真樹子（以上、保存修復科学センター）、皿井舞（企画情報部）、鉾井修一、小椋大輔、津村宏臣、高林弘実（以上、客員研究員）

東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力（②セ02-12-2/5）

目　　的

東南アジア諸国等においては、文化遺産の保存修復に関する国際協力や域内連携の動きが近年活発化しているが、なお多くの文化遺産を抱え、国ごとの保護体制に関するレベルの差も大きい。このため、当該地域における保存修復事業への協力及びこれに関する調査研究の実施を通じて文化遺産の保存・修復に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。

成　　果

1．カンボジア：⑴建築測量・図化研修：タネイ遺跡にて新規研修事業を開始した。GPSとトータルステーションによる遺構実測からCADによる図化まで基本的手順の技術移転を目的とし、アプサラ機構、プレアヴィヒア機構、JASAのカンボジア人スタッフが参加した。第１回は2012年７月30日から８月３日までの５日間で、上記各機関と早稲田大学より建築・考古を専門とする12名が参加した。第２回は2013年１月10日～18日のうち６日間で、新規を含む11名が参加した。⑵ICC出席：６月６日～７日にシエムレアプで開催されたアンコール遺跡保存開発国際調整委員会（ICC）技術会議に参加し、活動報告を行った。また、12月５日～６日開催の同年次総会にも参加し、書面報告と諸国際協力事業に関する情報収集等を行った。この間、微生物による石材保存への影響の評価に関するICC勧告案への意見書を作成し、事務局に送付した。⑶石造遺跡の微生物劣化に関する研究会：本研究に関しては、微生物種同定作業等を継続した。１月14日、アプサラ機構本部にて、同機構関係者と調査研究に参加した日韓伊専門家も交えて、2001年以来タネイ遺跡で行ってきた共同研究調査の成果を総括する研究会を同機構と共催した。

2．タイ：⑴漆工芸品の保存に関する協力：タイ文化省芸術局の要請により、８月23日～24日にバンコク市内ラチャプラディット寺院の扉に施された螺鈿装飾の保存に向けた基礎的調査を実施し、技法や劣化状態に関する調査所見と保存計画の提案等を同局に提出した。⑵研究会開催：８月24日にバンコクの国立ギャラリーにて同局と研究会を共催し、前中期計画期間における煉瓦造、石造遺跡等の保存に関する共同研究成果を総括するとともに、タイ側専門家による最近の研究成果等についても情報共有した。⑶報告書作成：上記研究会の内容を中心に、過去５年間の協力成果に関する報告書を英語版で刊行した。

3．インドネシア：⑴報告書作成：パダン被災文化遺産復興支援に関し、前年度実施した現地調査内容を中心に、図面等の基礎的データを含む報告書を日本語及びインドネシア語の両語併記にて刊行した。

4．モンゴル：⑴現地協議：３月４日～５日にウランバートル市の文化スポーツ観光省ほかにて、セレンゲ県アマルバヤスガラント寺院の保存管理計画策定等に関する協議を行った。

以上の今年度活動内容を成果報告書にまとめて刊行したほか、上記の通り、タイ及びインドネシアとの協力に関する報告書をそれぞれ刊行した。

刊行物：・『東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力　平成24年度成果報告書』 東京文化財研究所 13.3・『パダン歴史地区文化遺産復興支援報告書：2012-2012調査成果　Laporan Bantuan Rekonstruksi dan Rehabilitasi Kawasan Bersejarah di Padang: Hasil Penelitian tahun 2011-2012』（日本語・インドネシア語）東京文化財研究所　13.3・『Conservation of Monuments in Thailand [V]』（英語）東京文化財研究所　13.3

研究組織

○友田正彦、川野邊渉、佐藤桂、鉾井修一、柏谷博之、秋枝ユミイザベル（以上、文化遺産国際協力センター）、朽津信明（保存修復科学センター）、　神葉子（企画情報部）、深井啓（研究支援推進部）

西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（②セ03-12-2/5）

２．イラク

イラク人文化財専門家を育成し、イラク人による文化財復興を支援する。イラク国立博物館より保存修復家１名をアルメニアに招聘し、11月21日～28日にかけてアルメニア共和国歴史博物館にて開催した「考古青銅製品の保存修復に関する国際ワークショップ」と連携して、保存修復に関する人材育成を実施した。

３．西アジア周辺諸国における文化遺産の調査研究・保護への協力等

3-1. インド

アジャンター壁画の保存修復に関する報告書『Indo-Japanese Joint Project for the Conservation of Cultural Heritage, Series 3, Indo-Japanese Project for the Conservation of Ajanta Paintings–Digital Documentation of the Paintings of Ajanta Caves 2 and 9』を作成、刊行した。

3-2. 中央アジア

・タジキスタン出土の考古資料の保存をはじめとする、文化遺産保護活動への支援を実施した。また、壁画修復専門家１名をドイツより招聘し、６月12日に「タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復」に関する研究会を開催し、昨年度までに実施した保存修復成果の共有と公開を行った。

・キルギス共和国科学アカデミーとの文化遺産保護の分野における協力：文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業と連携し、９月に「考古遺跡発掘」と「出土遺物の保存修復」に関するワークショップ、２月に「考古遺物の保存修復処置」と「出土遺物のドキュメンテーション」に関するワークショップを実施した。

・カザフスタン、キルギス及びタジキスタンにおける文化遺産のドキュメンテーションに関するワークショップ協力：ユネスコ／日本文化遺産保存信託基金事業と連携し、９月にカザフスタン及びキルギス、11月にタジキスタンにおいてワークショップを実施した。

3-3. エジプト

JICA事業「エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト」のフェーズⅡにかかる国内支援業務を継続して実施した。

3-4. コーカサス

アルメニア共和国歴史博物館との考古青銅製品の保存修復に関する協力を実施した。文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業と連携し、ワークショップを５月、11月に開催した。

４．国際会議等への参加

「Expert Members Meeting of the Coordination Committee, Silk Roads World Heritage Serial and Transnational Nomination」（９月17日～20日、於ビシュケク、キルギス共和国、出席者：山内和也）。

研究組織

〇川野邊渉、山内和也、安倍雅史、久米正吾、島津美子、鈴木環、邊牟木尚美、川口雄嗣、田島さか恵、近藤洋、本郷浩志（以上、文化遺産国際協力センター）、杉原朱美、藤澤明、前田耕作、渡抜由季、有村誠、谷口陽子、松田泰典、山藤正敏（以上、客員研究員）、森本晋、石村智、田代亜紀子（以上、奈良文化財研究所）

在外日本古美術品保存修復協力事業（②セ04-12-2/5）

目　　的

日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、これらの保存修復の専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、海外で所蔵されている掛軸などの紙本絹本文化財及び漆工芸品のうち、本格的な修復が必要な作品を一旦日本に運び修復して返還することを目的としている。また、ワークショップを開催し、保存修復に必要な日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行う。

成　　果

1．作品修復：・キンベル美術館（アメリカ）所蔵　　十五菩薩来迎図　絹本著色　掛軸装２幅　修復中。・シンシナティ美術館（アメリカ）所蔵　源氏物語図屏風　紙本著色　屏風装６曲１隻　修復中。

2．作品調査：フランス：ギメ美術館（パリ）。ドイツ：ベルリン国立博物館群アジア美術館（ベルリン）。アメリカ：ホノルル美術館（ホノルル）。アルメニア：国立美術館（エレバン）、歴史博物館（エレバン）、チャレンツ記念館（エレバン）。グルジア：国立博物館（トビリシ）。イギリス：大英博物館、ヴィクトリア＆アルバート美術館（ロンドン）、アシュモリアン博物館（オックスフォード）

3．・Workshops on Conservation of Japanese Art Objects on Paper and Silk、場所 ベルリン国立博物館群アジア美術館（ベルリン・ドイツ）：(Workshop 1) “Basic -Japanese paper and silk cultural properties-”、2012（平成24）年７月11～13日、参加者10名。(Workshop 2) “Advanced–Restoration of Japanese hanging scroll”、７月16～20日、参加者11名。・“Workshops on the Conservation and Restoration of Urushi (Lacquer ware)”、場所　ケルン市博物館群ケルン東洋美術館（ケルン・ドイツ）：(Workshop Ⅰ) 11月２～３日、参加者７名。(Workshop Ⅱ) 11月６～９日、参加者６名。(Workshop Ⅲ) 11月13～16日、参加者６名。

発表

・楠京子、山田祐子、加藤雅人、川野邊渉、君嶋隆幸、井上さやか「デンプン分解酵素の除去確認方法について―ケルン東洋美術館蔵「霊照女図」を事例として」 文化財保存修復学会第34回大会　日本大学　12.7.1

・山田祐子、楠京子、加藤雅人、川野邊渉、君嶋隆幸、井上さやか「ケルン東洋美術館蔵「霊照女図」修復事例報告―肌上げ時における酵素使用の検討及び表具乾燥方法の新しい試み―」 文化財保存修復学会第34回大会　日本大学　12.7.1

・江村知子「光琳の作画における伝統と創造」 第７回JAWS10周年記念公開研究会　ハワイ大学マノア校　12.7.19

・皿井舞「平安彫刻における伝統と創造」 第７回JAWS10周年記念公開研究会　ハワイ大学マノア校　12.7.19

刊行物

・『在外日本古美術品保存修復協力事業　絵画／工芸品　平成23年度』 東京文化財研究所　12.10

研究組織

○川野邊渉、加藤雅人、江村知子、楠京子、山田祐子、川端冴子（以上、文化遺産国際協力センター）、早川典子、山下好彦（以上、保存修復科学センター）、山梨絵美子、綿田稔、皿井舞、城野誠治（以上、企画情報部）、安孫子卓史、深井啓（以上、研究支援推進部）